韓国における『古事記』研究（七）

――二〇一六～二〇一七年の学術論文を中心に――

田中千晶

韓国における『古事記』の専門的な研究は近代から始められ、特に一九八〇年代以降は本格的に研究が進展し、近年では年間十数本の研究論文が発表されている。『古事記』に関心を寄せる理由として、韓国に関連した記述の存在、神話の類似性などが指摘されている。[1]

本稿では、近現代における『古事記』の受容研究の一環として、韓国ではどのように『古事記』が研究されているのか、また用いられているのかについて明らかにしていくため、近年の学術論文を紹介する。

二〇〇〇年までの研究動向及び、二〇〇〇年～二〇一五年における研究論文リストに関しては、拙稿[3]を参照されたい。[2]

◇

論文の検索については、RISS（Research Information Sharing Service）[4]を基本とし、補助的にKISS[5]とDBpia[6]を用いた。RISSで検索対象を韓国内学術誌の論文とし、キーワード「古事記」で検索すると、二九三件がヒットした。[7]このうち本稿では、二〇一六年～二〇一七年の二年間について紹介する。この期間では韓国内で三十一件の学術論文や発表要旨集が刊行されたが、[8]題目や本文内に加え、論文のキーワードとして登録されている「古事記」も検索されるため、論文の主旨が『古事記』に限らないものも含まれている（研究年表の6、8等）。しかし『古事記』が各方面の研究分野からどのように用いられているかを知るためにも、件数に含めることとする。すべての研究論文の内容を紹介することは困難であるため、発行年順に題目等を記した研究年表を挙げ、一部の論文について要旨を掲載した。[9]二〇一八年以降の論文に関しては、後の機会に譲ることとする。

研究年表（二〇一六～二〇一七年）

※番号に□を付した論文は後に要旨を記載する。

	題目	著者	学術誌名、巻号	発行所	発行年
1	『古事記』に現れた兄弟像に関する一考	朴美京	日本學研究47	檀国大學校日本研究所	二〇一六・一
2	日本上代文献神話に現れた綿津見神に関する考察 ―『古事記』と『日本書紀』を中心に―	朴信映	日語日文學研究96―2	韓国日語日文学会	二〇一六・二
3	日本神話に現れた異界分析―イザナギ・イザナミ神話モチーフを中心に―	李之連	日本學論集33	慶熙大学校大学院日語日文学科	二〇一六・三
4	『古事記』『日本書紀』人代巻に現れた海のイメージに対する考察	朴信映	日本學論集33	慶熙大学校大学院日語日文学科	二〇一六・三

5	近世中期日本知識人の三韓認識研究 ― 〝スサノオ〟解釈を中心に―	權東祐	円仏教思想と宗教文化67	円光大学校円仏教思想研究院	二〇一六・三
6	『長生竹島記』の天下	權五曄	韓國日本研究總聯合會第5回國際學術大會 2016―4	大韓日語日文学会	二〇一六・四
7	スサノヲ神話に関する一考察	金祥圭	韓國日本研究總聯合會第5回國際學術大會 2016―4	大韓日語日文学会	二〇一六・四
8	『日本霊異記』に現れている異界―死者蘇生譚における冥界の表象を中心に―	韓正美	日本學研究48	檀国大學校日本研究所	二〇一六・六
9	『風土記』における「恐怖心」の表記字―「畏」「懼」「恐」「惶」「悚」「憚」―	清水れい子	東北亜文化研究47	東北アジア文化学会	二〇一六・六
10	『古事記』の構想―天孫の勅語と〝韓国〟―	金祥圭	東北亜文化研究47	東北アジア文化学会	二〇一六・六
11	三韓一統意識の形成時期に関する考察―日本書紀〝三韓〟記事の分析を中心に―	盧泰敦	木簡と文字16	韓国木簡学会	二〇一六・六
12	風土記の希望表現に関する考察	李眞淵	比較日本學37	漢陽大学校日本学国際比較研究所	二〇一六・九
13	アメノヒボコをめぐる〈貴種流離譚〉	井上舞	日本語文學70	日本語文学会	二〇一六・九
14	『古事記』の接続詞「尓」はどこから来たか	瀬間正之	日本研究17	釜山大學校日本研究所	二〇一六・十一
15	『古事記』に見える日本人の死生観	鄭孝雲	大韓日語日文學會 2016年度秋季國際學術發表會 2016―11	大韓日語日文学会	二〇一六・十一
16	『記紀』における嫉妬モチーフ	崔升銀	日語日文學研究99―2	韓国日語日文学会	二〇一六・十一
17	日本学界での古代韓・日関係史認識の起源―日本国学者たちの『日本書紀』研究―	朴賢淑	韓國史學報65	高麗史学会	二〇一六・十一
18	東アジア始祖伝承神話に現れた家族関係と孝	金倫敬	孝学研究24	韓国孝学会	二〇一六・十二
19	『古事記』の構想―倭建命と大長谷王子の人物造形―	金祥圭	韓国日本研究総連合会第5回国際学術大会 2017―4	大韓日語日文学会	二〇一七・四
20	日本の古代文学における「新羅」と「高麗」―その用例の文化史的考察―	袴田光康	日本學研究51	檀国大學校日本研究所	二〇一七・五
21	『古事記』に現れた父と息子―ヤマトタケル説話を中心に―	朴美京	人文学研究107	忠南大學校人文科学研究所	二〇一七・六
22	『日本書紀』と〝神夷〟・華夷の二重構造	李在碩	日本歴史研究45	日本史学会	二〇一七・六
23	『古事記』の構想―倭建命の人物造形―	金祥圭	第34次 東北アジア文化学会春季国際学術大会	東北アジア文化学会	二〇一七・七
24	飯豊王女に関する一考察	崔元載	日本語文學78	日本語文学会	二〇一七・八
25	『日本霊異記』における「恐怖心」の表記に関する考察	清水れい子	比較日本學40	漢陽大学校日本学国際比較研究所	二〇一七・九
26	スサノヲの「祓」と「大祓」―祭儀神話としての『古事記』―	權赫晟	韓国日本語文学会第49回国際学術大会	韓国日本語文学会	二〇一七・十
27	記紀神話に見えるサルタヒコ再考察	趙幼美	韓国日本語文学会第49回国際学術大会	韓国日本語文学会	二〇一七・十
28	韓日創世神話比較考察―韓国の〈創世歌〉と日本の『古事記』を中心に―	崔光準 權善英	日語日文學研究103―2	韓国日語日文学会	二〇一七・十一
29	高木神の木神的イメージに対する考察―記紀神話伝承を中心に―	金美善	日語日文學研究103―2	韓国日語日文学会	二〇一七・十一
30	古事記における在の研究―日本書紀の修飾構造の補足を含めて―	安熙貞	日本語教育82	韓国日本語教育学会	二〇一七・十二
31	サルタヒコの形象再考察―老人イメージ形成過程を中心に―	趙幼美	日本語文學75	韓国日本語文学会	二〇一七・十二

論文要旨（年表より抜粋）

1 朴美京「『古事記』に現れた兄弟像に関する一考」（『日本學研究』47、檀国大學校日本研究所、二〇一六年一月）

『古事記』の兄弟説話に注目し、兄弟像の様相とその意味について考察した論考。『古事記』の中の兄弟説話を中心に分析しながら、『日本書紀』の記述内容及び表現方式とも比較検討することで、これら『古事記』の兄弟説話が『古事記』という独自の作品世界の中でどのような意味をもつのかを糾明した。検討結果によれば、『古事記』に現れる兄弟の姿は、友愛や和合の関係と言うよりはむしろ皇位を取り巻く、相反した理解から始まった葛藤と対立の関係が大部分であった。また兄は劣等で否定的な人物であり、弟は優越で肯定的な人物としてそれぞれ造形されており、兄よりも弟が目立っていることが分かった。なおかつ、これら兄弟間の葛藤での最終勝者はほとんどが弟であり、兄は弟に屈服される、もしくは殺害されるという点が著しい特徴であった。このような『古事記』の中の兄弟像は、『日本書紀』の中の兄弟説話とは特に異なるため、これは対内的に天皇家の神聖性とその支配の正当性を主張する『古事記』が、既存の伝承を国内の情勢に合わせてうまく利用して構築された『古事記』のみの独自の構想である、ということを述べた。

2 朴信映「日本上代文献神話に現れた綿津見神に関する考察―『古事記』と『日本書紀』を中心に―」（『日語日文學研究』96―2、韓国日語日文学会、二〇一六年二月）

日本神話に登場するワタツミ、海の神・力に着目した論。『古事記』と『日本書紀』が伝える神話では、表面的には天上界や天神の活躍が目立つにもかかわらず、その背景には海との関係が常に存在すると言ってよい。海を代表する神としてはワタツミがいる。『古事記』ではワタツミの生成過程が二回にわたって記録されている。一つ目はイザナギ・イザナミの神生みの伝承から海の神である大綿津見神が登場する。以後、イザナギの禊の伝承に至っては三柱のワタツミが生成される。禊を行う過程では三柱のワタツミ以外にも三柱のツツノヲと三貴子が一緒に生成される。海と関係深い神々と三貴子が一緒に生成されることだけでも『古事記』に現れた海の位相が確認できる。『日本書紀』の本文ではワタツミの生成に関しては、特に何も伝えていない。ワタツミの活躍するところは山幸・海幸の場面であるが、その主な内容は山幸のワタツミの宮訪問と言えるだろう。これは王者になるためのイニシエーションだと解釈した大林太良の主張のように、天上の系統を受け継ぐとしても、海の助け若しくは海の力を獲得してからこそ王者としての正当性を持つといっても良いのであろう。

5 權東祐「近世中期日本知識人の三韓認識研究 ― 〝スサノオ〟解釈を中心に」（『円仏教思想と宗教文化』67、円光大学校円仏教思想研究院、二〇一六年三月）

近世の日本の知識人たちの朝鮮あるいは「三韓」に対する認識は、決して単純な方向にのみ表出されなかった。その中の代表的ともいえる二つの視覚的にも、藤貞幹の「衝口發」と本居宣長の「鉗狂人」の議論が挙げられる。特に彼らの論争の中で注目したいのは、「スサノオ（素盞嗚尊）」に対する貞幹と宣長の解釈である。文献考証学的分析の観点から古代史と文化を理解しようとする貞幹の立場と、『古事記』を中心に古代の認識をしようとする宣長の神学的立場は、「スサノオ」の解釈を通じて、まったく別の方向に表出されていると考えられるからである。また、この論争と同様の視点で表示される伴蒿蹊の「スサノオ＝檀君」の神話の解釈は、当時の日本社会で「スサノオ」による「三韓」の認識のもう一つの重要な事例となる。このようにスサノオと檀君を一体化する新解釈は、近代の「日鮮同祖論（あるいは日鮮同根論）」の根拠となるが、近世の「スサノオ＝檀君」の神話解釈は、近代とは異なる視点から展開された点を見逃してはならないだろう。したがって本論は、近世の「スサノオ」の解釈がどのような「三韓」のイメージを創出していくのかについての理解の尺度となり、また、中世神話と他の近世の神話がどのような流れで展開されるかを理解する一つの可能性ともなるだろう。

10 金祥圭「『古事記』の構想―天孫の勅語と〝韓国〟―」（『東北亜文化研究』47、

東北アジア文化学会、二〇一六年六月）

高千穂に下った天孫の詔と韓国（からくに）を分析し、その意味を知ることができると論じた。第一に、天皇による国見と第一巻は同じ性格を帯びたものであり、次の婚姻の伝承で天孫の詔を伝えている。これは第二巻の歴史に関する手がかりとして働き、応神天皇の伝承は構造的に似ている。まず、祖先神は、葦原の中つ国への移動に応じて大国主から譲り受け、最初の天皇の最高権力に対する正統性を確保する。つまり天孫の出現は、主権が達成した天の下の構成において最も重要な事件であった。このような『古事記』の世界はまた、関連する伝承を通じて主権の正統性をもって、最高権力の構成を完了している。天孫の詔の中の韓国は、筑紫の西に存在し、新羅の服従の伝承を確認できる国である。また、ユートピアである韓国もすぐに天皇の世界に含まれる。即ち、支流として日本の外界であることが描き出された。『古事記』では、各巻の伝承を通して天皇の世界を伝えている。第一巻のアマテラスによって設定された世界秩序を継承し、第二巻の新羅征服の伝承が実現する。これは歴史伝承の形で韓国への支配を表したもので、神功皇后伝承に書かれた西ノ方はその位置を示している。天皇が支配する世界を説明するために、天孫の詔が伝えられた。つまり、神々の時代とすべての過去の天皇を結びつける部分と考えられる。別の言い方をすれば、いわゆる小さな帝国思想に基づいた皇帝の世界として賞賛された。降臨地の天孫の詔は、応神時代の後に韓国の背景を定めた意図的な発言であり、第一巻として設定されたのである。

15 鄭孝雲「『古事記』に見える日本人の死生観」（『大韓日語日文學會　2016年度秋季國際學術發表會』2016―11、大韓日語日文学会、二〇一六年十一月）

2014年日本文部科学省宗教統計調査によれば、神道系宗教信者の数は約9217万人で人口の72・5％を占め、仏教係の8713万名（68・6％）より多い。ところが、2014年日本総務省統計局が調査した日本人総人口数は1億2708万人と報告されているから人口より宗教信者が多いという現象を見せる。これは日本人の宗教的重層性の特色に見える現象で、八世紀代の神仏習合思想と見られるが、その起源は仏教受容期の〝審神〟思想と用明天皇の〝信仏法尊神道〟の両立思想と見出すことができる。問題は、今日でもなぜ日本では土着宗教の信徒を受け入れる人が多いかと言う点である。韓国の場合、外来宗教である仏教、儒教、道教、キリスト教などが収容されながら無宗教（巫教）は歴史の全面で退き民衆の底辺に沈澱したが、日本の場合は多様な外来宗教が伝来されたにもかかわらず信徒が今日までも日本人の宗教として残り、彼らの死生観に多くの影響を及ぼしていると思われる。一方、従来、古代日本人の死生観に関する先行研究は、平安時代初期の最古説話集である『日本霊異記』や『古事記』、『日本書紀』に見える神話の内容分析を中心に行われたと見られる。本論では神話、説話をテキストにして分析する方法を使用して歴史的観点の語にキーワード分析中心の方法論で古代日本人の死生観に着目した。日本最古の歴史書である『古事記』を分析の対象とした。方法は『日本書紀』を分析した方法と共に死生観を魂観と他界観で分けてこれら観念と深い関連性を持つ用語の用例分析を通じて、すなわち前者の場合、〝厳、魂、鬼、神〟などの用語を、後者の場合〝版楽、浄土、仙界、黄泉〟などの用語を中心に検討した。

16 崔升銀「『記紀』における嫉妬モチーフ」（『日語日文學研究』99―2、韓国日語日文学会、二〇一六年十一月）

本論は、日本の古典文学における嫉妬モチーフの文学的展開を考察する研究の一環の成果である。『古事記』、『日本書紀』において非常に嫉妬深い人物として描かれている石之日売命、須勢理毘売命、忍坂大中姫の嫉妬譚を分析し、類型分類を試みたものである。その類型分類に先立ち、当時の嫉妬に対する認識について考察した。『古事記』では「嫉妬」を「うはなりねたみ」と読む。これは「こなみ」（前妻のこと）が「うはなり」（後妻のこと）を嫉妬するということで、家の秩序を守る手段として正妻だけに認められる正当かつ必要なものであった。嫉妬譚の類型分類を行った結果、須勢理毘売命の嫉妬は、夫大国主との和合につながる戦術として機能しているのに対し、石之日売命と忍坂大中姫の嫉妬は、あくまでも夫や相手となる女性に損害を与える戦術として機能しているものであった。このように嫉妬行為（戦術）によって、二つの類型（防衛的嫉妬モチーフ、攻撃的嫉妬モチーフ）に大別することができた。

17 朴賢淑「日本学界での古代韓・日関係史認識の起源―日本国学者たちの『日本書紀』研究」（『韓國史學報』65、高麗史学会、二〇一六年十一月）

ヨーロッパで韓国学及び東洋学研究が本格的に始まった十九世紀末に着目し、これに影響を与えた日本での国学研究に対して注目した論。初期ヨーロッパの古代韓・日関係史の認識において、日本国学の役目が決定的であったためである。したがって国学者たちの『日本書紀』研究を中心に、彼らの認識と国学の特徴について調べた。『日本書紀』には韓・日関係史認識に決定的な影響を及ぼすようになる神功皇后の〝三韓征伐〟が記述されている。この神功皇后説話に基盤のある日本の神国思想と対外意識は、対外的緊張感が高くなる度に強烈に表出された。国学者たちの『日本書紀』研究以前である鎌倉時期、南北朝時期にも『日本書紀』は皇室で重要な歴史書と見なされた。しかし近世と『日本書紀』を単独で研究したものではなかった。近世に入り、国学の出発は中国の古典的テキストによって古代日本のテキストへの変化に焦点を置いた。国学者である荷田春満は、古典での回帰を基本に『日本書紀』神代紀の記事が〝道〟が分かるための人間に必要なすべてのものだと述べた。賀茂真淵は『古事記』と『日本書紀』などで古代人の〝心〟を読むことができる〝古典〟としての意義を見始めたし、テキストに対する厳格な文献学的方法論と日本中心主義的世界観を見せてくれた。『古事記』と『日本書紀』に対する文献学的研究が発達し始めたのは、国学の集成者である本居宣長を通じてである。彼は『古事記』と『日本書紀』の内容を文字どおりの歴史的事実として受け入れることによって、日本中心主義的世界観及び歴史認識を形成した。このような彼の主張は、平田篤胤によって継承された。しかし平田篤胤は、本居宣長までの『古事記』に対する絶対的正統性から離脱していった。国学者たちは次第に『古事記』と『日本書紀』の世界観を絶対的なこととして受け入れ、これらを通じて古代の言語と神話に対する盲目的な信奉と日本中心主義的世界観を形成していった。しかし古代の日本中心的世界に対する盲目的な信奉という国学の特徴にもかかわらず、国学者たちから見える文献に対する実証主義的で合理的な態度は、西洋の学者たちが日本の歴史と文化、そして『日本書紀』に関心を持つきっかけになったのである。

18 金倫敬「東アジア始祖伝承神話に現われた家族関係と孝」（『孝学研究』24、韓国孝学会、二〇一六年十二月）

孝は、生命の永続性に対する祈願と祖先崇拝から始まる。本論は、先行研究において主に扱われて来た孝行談論ではない、始祖伝承神話に盛り込まれた家族関係と孝意識を検討しようとするものである。一般的に、孝行説話で分類する口碑文学と文献説話などは、皆意図的に孝を宣揚するために作り出されたものであり日常的で普遍的人倫情緒である孝だけでなく、政治理念に機能した孝意識を盛り込んでいる。これに比べ、孝に対する意図的宣揚意識がない始祖神話は、始祖の神聖性と完全性を担保にしながら、原始的な孝の形態を持っている。韓国の檀君神話及び東明王神話、モンゴルの始祖及びゲシル神話、満洲の天宮大戦神話、日本のアマテラスオホミカミ神話に現れた家族関係と孝形態を通じて、東アジアの孝の、原型の水平的・相互尊重的一面を考察した。

21 朴美京「『古事記』に現れた父と息子―ヤマトタケル説話を中心に」（『人文学研究』107、忠南大學校人文科学研究所、二〇一七年六月）

ヤマトタケルに関する記録は『古事記』、『日本書紀』に見える一連の記事以外にも『常陸風土記』、『肥前風土記』に多くの断片的な記事が伝わっている。その中でも特に『古事記』のヤマトタケル伝承は、父景行天皇によって東国征伐と西国征伐を命じられ追い出された彼の姿が悲劇的に描かれることと同時に、歌謡を挿入してヤマトタケルの最後を感動的に描き出していて、景行天皇段のヤマトタケル説話は『古事記』の中でも最も文芸的にすぐれた部分という評価とともに、幾多の注目を引いて来た。本稿はこのようなヤマトタケル説話を父と息子の関係という観点で見直したことで、父景行天皇と息子ヤマトタケルの父子関係に見える『古事記』、『日本書紀』の差異に注目することで、『古事記』編者がどのような意図で既存の伝承を活用しており、その結果構築された『古事記』の構想はどのようなものなのかをテキスト上の文脈を通じて明かそうとしたものである。結局ヤマトタケル説話は、絶対権力を脅威するどのような存在（勢力）も、それがたとえ意図されたところではなかったとしても断じて死に至るしかないし、ここにはどのような私的な感情や

憐愍もあることができないことを見せてくれる装置だったと言えるだろう。

24崔元載「飯豊王女に関する一考察」（『日本語文學』78、日本語文学会、二〇一七年八月）

本稿は、『記』『紀』における「飯豊王女（イヒトヨ）」の在り方をめぐって、その人物像や葛城の氏族との関わりについて考察したものである。まず、「イヒトヨ」の人物像は、王権の危機に擁立された、巫女的な能力をもつ独身に近い女王であると同時に、男王の出現までの中継ぎ的な女王として書かれている。二つ目に、イヒトヨと葛城氏との関わりは、ソツヒコを祖先としていることからそれは充分に考えられる。葛城系氏族のツブラオホミの伝承は雄略による葛城の玉田宿禰系の滅亡を意味するもので、この背景として、葛城氏の位相に大きな変化があったことを示唆している。三つ目に、一言主大神との関連性については、『記』『紀』では葛城山の大猪の話を直前に配置し、最初は神の掌握に失敗したものの、最終的にその祭祀に成功したことを強調している。これは祭祀をめぐって大王家と一言主大神の奉斎氏族である葛城氏との攻防の物語であったと考えられる。四つ目に、「イヒトヨ」の別名にある「忍海」の表記は在地の有力な忍海氏との関係性を示している。窮地に追い込まれていた葛城系のオケ・ヲケの二王子を、一族で支援したのは忍海氏であり、またイヒトヨの中継ぎ的な女王としての役割にも忍海氏の強力な支援があったと考えられる。『古事記』にイヒトヨよりさきに書き出している「忍海郎女」はその象徴的な表れである。

28崔光準・權善英「韓日創世神話比較考察―韓国の〈創世歌〉と日本の『古事記』を中心に―」（『日語日文學研究』103―2、韓国日語日文学会、二〇一七年十一月）

韓國の巫歌である〈キムサンドリ本〉と〈チョンミョンス本〉、日本の『古事記』の両方で発見されている神話の要素は、天地開闢、火の根本、日月調整神話である。天地開闢からこの世の起源を説明することができるため、天地開闢神話は創世神話において重要な意味を持つ。そして、天地開闢があるとき神格も誕生するということを知ることができる。その神格は複数である。韓国の場合は、彌勒、釋迦と呼ばれる二つの神格があるが、『古事記』の場合はイザナギ・イザナミの代まできて再び神々が創造される。水の根本とは違って、火の根本神話は両国でいずれも見られる。日月調整神話は韓日両国の関連性が最もよく見られる部分である。創世神の巨身的性格を説明する部分と、人世獲得競争の賭けという部分に適用することができる。〈キムサンドリ本〉に見える人間創造神話は生命の進化論を連想させる。虫から人間に成長するというのは時間の流れを示すものと見られる。そして金の盆と銀の盆に落ちた虫が、それぞれ男と女に成長するのは、人間と日月の密接な関係を表している。〈チョンミョンス本〉や『古事記』には見られない具体的な人間創造神話は、このように日月星辰との関連性をもつ類似性が類推できる。両国の創世神話を比較するにおいて、世界創世神話の要素を分析することをはじめとして、その類似性と特異性を区分してみたが、これは韓国と日本の創世神話比較研究のごく一部分に過ぎない。巫歌の形で伝承されてきた韓国の場合とは異なり、明らかな編纂目的を持っている日本の場合はむしろ歪曲の可能性があるため、幅拾い資料分析が要求される。

29金美善「高木神の木神的イメージに対する考察―記紀神話伝承を中心に―」（『日語日文學研究』103―2、韓国日語日文学会、二〇一七年十一月）

高木神（たかぎのかみ）の『古事記』における別の神名は、高御産巣日神（たかみむすひのかみ）という名前で、神代のニニギの天孫降臨に至るまで、高木神として十四回登場している。また『日本書紀』においても高木神の別名である高皇産霊尊として二十九回も取り上げられている神である。しかし、『日本書紀』には高木神という木の神としての伝承は描かれていない。それに比べ『古事記』における高御産巣日神は、高天原の平定伝承から高木神（高い木の神）という別名の木の神として登場し、地上世界との連携性が描かれている。天神が天上世界から地上世界、地上世界から地下世界へ移動し疎通するためには安全な通路が必要になる。この時、地上へ降臨する天神のための神座や、移動通路になる巨木を神木であると想定すれば、高木神のモチーフは、その神が本来持っていた天神のイメージの上に、木の神

のイメージをオーバーラップさせ、天上世界から地上世界、そして地下世界への継続的な連携や子孫たちとの疎通を願った天神の他のイメージではないかと考える。

31 趙幼美「サルタヒコの形象再考察―老人イメージ形成過程を中心に」（『日本語文學』75、韓国日本語文学会、二〇一七年十二月）

『古事記』と『日本書紀』の神代の話に登場する「サルタヒコ」は天の世界から地の世界への道に登場し、降臨する「ニニギ」一行を無事に日向に導く神である。日向に案内される「ニニギ」が、その世界で子孫を生むストーリーに展開され、記紀神話の核心である系譜が完成されるということから、この「天孫降臨段」は、重要な神話と言われる。この「天孫降臨段」に出現する「サルタヒコ」を老人として認知し形象化するようになった背景には、類似の役割を果たす「シホツチ」を考察しなければならない。まず、「シホツチ」が出現する舞台は、天孫勢力が存在している世界から別の世界に移動できる「中継地域」に当たるという点から、「サルタヒコ」との類似点を見つけることができる。なお、他世界に移動できる手段を提供するという点から、「サルタヒコ」と同じく天孫勢力の協力者と理解できる。「他界への中継者」という面貌は、伝承が重なりつつ、徐々に同一化されていくことを、神社の起源から確認できる。『日本書紀』では「シホツチ」を徹底的に老人として描き出していることから、二神のイメージ結託が行われ徐々に民衆の意識の中で、老人の服を着た「サルタヒコ像」が作られてきたことが分かる。

1 魯成煥「神話学から見た韓国の記紀研究」（『國文學　解釈と教材の研究』51―1　學燈社　二〇〇六年一月）

2 研究動向に関しては注1及び、金祥圭「韓国における日本神話研究の現状」（『古事記年報』46　古事記学会　二〇〇四年一月）を参照した。

3 田中千晶「韓国における『古事記』研究（一）―二〇〇〇～二〇〇二年の学術論文を中心に―」（『水門』25　勉誠出版　二〇一三年一〇月）、同「韓国における『古事記』研究（二）―二〇〇三～二〇〇六年の学術論文を中心に―」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』50　二〇一四年三月）、同「韓国における『古事記』研究（三）―二〇〇七～二〇〇九年の学術論文を中心に―」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』51　二〇一五年三月）、同「韓国における『古事記』研究（四）―二〇一〇～二〇一一年の学術論文を中心に―」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』52　二〇一六年三月）、同「韓国における『古事記』研究（五）―二〇一二～二〇一三年の学術論文を中心に―」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』53　二〇一七年三月）、同「韓国における『古事記』研究（六）―二〇一四～二〇一五年の学術論文を中心に―」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』54　二〇一八年三月）

4 ＲＩＳＳは韓国教育学術情報院によるデータベース。韓国内の大学で所蔵する学術誌論文の記事索引、学位論文、単行本、学術誌（タイトル）が検索できる。http://www.riss.kr/index.do

5 韓国学術情報（株）（ＫＳＩ）が提供する学術論文データベース。韓国内一三〇〇余の学会および研究所が発行する学会誌および研究刊行物に掲載されている約一四〇万件の論文が検索できる。http://kiss.kstudy.com/

6 （株）ヌリメディアが提供する学術・学位論文データベース。約二三〇万件の論文を収録（二〇一八年九月）。http://www.dbpia.co.kr/

7 二〇一八年一〇月二三日現在。漢字「古事記」もハングル表記「고사기」も同数である。

8 韓国の学術誌に掲載された日本人研究者の論文を含む。

9 年表には日本人研究者による論文も掲載した。要旨は、原則として韓国人名の筆者による論文を選択し、私に翻訳し要約あるいは筆者による要旨を簡略化した。論文名等は適宜日本語に変えた。

“Kojiki” studies in South Korea（7）
—— Academic papers from 2016 to 2017 ——

TANAKA Chiaki

Abstract : In this article, I introduce the study of “Kojiki” researches in South Korea. I will analyze the academic papers on “Kojiki” after 2000. South Korea has worked on its researches in full scale the 1980's.
The similarity of the myths of Japan and South Korea, and the descriptions of the Korean Peninsula have been discussed there.

Key Words : kojiki, South Korea, Japanese myth

要旨：韓国においては、近代に入ってから『古事記』の研究が始められた。朝鮮半島に関する記述の存在、神話の類似性などが研究対象として関心を持つ理由であり、本格的に研究が進展してきたのは 1980 年代以降である。その研究方法は大きく次の二つに分けることができる。一つは日韓の神話を比較し、日本にいかに文化的影響を与えたかを解明する研究、今一つは『古事記』『日本書紀』の特殊性をそれぞれのテキストに分離して探る研究である。方法の異なる両者を結び、且つ韓国の『古事記』研究の転機となった研究が、魯成煥『日本神話の研究』（報告社、2002 年 9 月）といえる。本稿ではこの『日本神話の研究』を転換点とみなし、刊行前夜にあたる 2000 年以降、どのような視覚から『古事記』が研究されているのかについて、韓国内における学術論文を紹介する。

キーワード：韓国、古事記、研究動向